



住民の安全・安心の確保のため 見守り活動や自治会形成に尽力

山田交番の所長として赴任した石川さんは、所員を率いて仮設住宅の見守り・訪問活動や自治会形成などに取り組み、治安維持に努めた。

「住民のもとに通い、話を聞く」を徹底

東日本大震災の津波は、国道沿いにあった宮古警察署山田交番も直撃した。そのため、震災直後は、役場の会議室が仮の交番となった。その後、役場のすぐ近くにプレハブ2階建ての交番が建てられ、開所となったのが平成23年（2011）6月1日。これに合わせ、5月中旬、岩手県警公安課から山田交番所長として赴任したのが石川康さんだった。交番の開所と同時に所員も増強され、交番の体制強化に対する岩手県警の意気込みが感じられる。交番には他に、全国からの応援警察官も配属され、計10数人の体制となった。

町内では、交番開所直後の6月中旬から仮設住宅への入居が始まっていたことから、仮設世帯への見守り・訪問活動が、所員の重要な仕事だった。活動は、町職員や支援に入ったNPO

法人スタッフと情報交換・協力しながら展開。訪問活動以外にも、夏までは毎日のように遺体が発見されたため、検視担当者への引き渡しに当たったほか、拾得物の届け出への対応なども行ったが、「新しい生活環境下にある住民の方々の不安をやわらげ、安全・安心を確保することが、私たちの最重要任務でした」と石川さんは当時を振り返る。

所長である石川さんが訪問・見守り活動を直接行うことはなかったが、所員からはその都度報告を受け、状況に応じて指示を出した。徹底させたのは、「町職員やNPO法人スタッフと訪問が重複してもかまわないので、とにかく何度でも通って話を聞く」ということ。その結果、所員からは、「何度も足を運ぶうちに、本音を話してもらえようになった」「警察官のあなただから相談したい、と言ってもらえた」といった報告もあった。

自治会形成を促し、「共助」の仕組みづくり

仮設住宅への入居が落ち着くと、次に町職員やNPO法人スタッフと一緒に取り組んだのが、仮設団地における新しい自治会の形成だった。具体的には、住民の中でリーダーとして活動してくれそうな人に交渉して役に就いてもらい、その人と協力しながら団地内で住民が集まる機会をつくり、住民主体で「共助」に取り組んでもらうのだ。石川さんたちは警察という立場から、団地内で防犯講話・交通安全講話・登下校の見守りなどを企画し、住民が部屋の外に

出てコミュニケーションをとる機会を増やすことに心がけた。他の仮設団地にも「よその仮設団地ではこんなイベントをやっているんですよ」と知らせてきっかけを作り、取り組みを少しずつ広げていった。

このような自治会形成に奔走する中、石川さんは翌平成24年（2012）3月末に離任。4月からは警察庁の、災害を担当する部署に2年間出向した。ちょうど国では災害対策基本法の見直しが行われている時期で、山田町での活動・取り組みなどの経験を生かすことができた。さらに岩手に戻ってきてからも、災害対応を含む警備部門に配属されており、山田町での経験を今につなげている。



写真中央に山田交番。手前は職員宿舎。背後に山田消防署があり、右奥には山田病院が見える



2011年12月1日、山田町役場屋上より撮影。仮設の交番は写真右側、2階建てで外階段が付いた建物（岩手日報 2021年2月4日付）



現在の山田交番。高台に移転した



石川 康（いしかわ やすし） | プロフィール
1961年生まれ。奥州市出身。大学卒業後、岩手県警察官を拝命。盛岡西警察署警備課長、岩手県警公安課次長を経て、山田交番所長に。

岩手県警察本部

警備部長
石川 康さん



復興事業を完了させたいと 応援職員から山田町職員へ

長崎県新上五島町から派遣された高山さんと、青森県南部町から派遣された市澤さんは、復興事業のさなかに山田町職員採用試験を受け、町職員となり事業を完了させた。

港湾整備技術者として 各種整備事業を推進

他の被災地同様、震災後の山田町には全国各地の自治体から多くの応援職員が派遣された。震災後に町が抱えた膨大な復旧・復興事業は、彼らの存在無くして進まなかった。そうした応援職員の中に、派遣後に山田町の採用試験を受け、山田町職員になって定住した人がある。

一人は、長崎県新上五島町から水産商工課に派遣された高山賢次さんだ。平成23年（2011）10月に災害対応派遣で来町し、同年暮れにいったん帰ったものの、4カ月後の平成24年（2012）4月に応援職員として赴任。漁港整備や漁業集落整備の専門技術者だった高山さんは、その豊富な経験を生かし、山田町で漁港の復旧や防潮堤の整備、漁業集落の整備を担当した。町には港湾整備の技術者がいなかったこともあり、高山さんの仕事量は多かったが、「や

りがいがあり、忙しいと感じたことはなかった」と振り返る。

中でも忘れられない事業が、大浦地区の整備だ。住民の声をできるだけ反映させるため、ほぼ毎日通って聞き取りや話し合いを行った。

「ここは高台に民家が残り、当初はその下の防潮堤のそばに道路が整備される予定でした。でもそれでは高台に住む住民の方々が不便ですし、道路やその周辺では防潮堤による圧迫感が強い。そこで道路をかさ上げしたのです」。

次第に住民と親しくなり、山田町での暮らしになじんだ高山さんは、山田町の採用試験を受けて平成29年（2017）4月から同町職員になった。

「山田の人はやさしい。出張期間中に民宿で自炊していた時も、同僚の奥さんが毎晩夕食を持ってきてくれたんです。また、町民の皆さんは『町を復興させよう』という前向きな気持ちが強くて、感銘を受けました」と話す。

昨年完了したオランダ島の整備事業にも携わった高山さん。ここを拠点に山田町の観光業が盛り上がることを期待している。

「機能性が高い道路づくり」 を目指す

応援職員から山田町職員に転職したもう一人が、青森県南部町から派遣された市澤裕二さんだ。平成28年（2016）4月、2年間の予定で山田町建設課に赴任。主な仕事は道路工事の発注と施工管理だったが、「経験も浅く、しかも震災前の山田町を知らずに写真や資料もない中での道路整備だったので、課内の技術者に教えてもらいながら目の前の仕事を一つひとつやるので精一杯だった」と思い起こす。そんな中で目指したのが、「できるだけ低コストで、震災前よりも機能性が高い道路づくり」だった。



市澤さんが担当した、国道45号から織笠漁港へ向かう町道。上は工事前、下は工事後。道路整備に併せて宅地造成も行った場所で、宅地のなかには個人所有地も含まれていたそう。仮設の事務所で営業している方に、やっと本来の形で仕事をしてもらえるという嬉しさと、小規模ではあったが更地から完成形にできた達成感でいっぱいだったという

例えば、側溝を入れなくても水をうまく操れることができる仕組みなど、施工業者に相談しながら工夫を図ったという。

当手を振り返ると忙しい日々だったが、やりがいが大きかった。それだけに、手がけている事業を自分の手で完了させたいと、市澤さんは任期のある応援職員から山田町職員への転職を決意する。平成29年（2017）秋に山田町職員採用試験を受け、翌年4月から勤務。その後、道路整備を完了させることができた時には、達成感と、町に貢献できたことへのうれしさがこみ上げた。

市澤さんはまた、派遣を通じて人間として成長できたことを感謝している。町民とのやりとりの中で「助けてほしい」と言われた時、町民の思いに耳を傾けながらできるだけその希望をかなえることこそ、自治体職員の仕事の本質であると気付いた。今は、令和元年の台風19号で被災した道路の整備事業に取り組む日々だ。



被災時の小谷島漁港の様子。津波に襲われた堤防が無残な姿になっている。左は完成間近の小谷島漁港。きれいな姿に生まれ変わった



<右>高山 賢次（たかやま けんじ） | プロフィール
1966年生まれ。長崎県新上五島町出身。2011年10～12月まで災害対応派遣で山田町水産商工課に赴任。いったん新上五島町に帰ったあと、2012年4月～2017年3月、応援職員として同課に赴任。同年4月から山田町職員として勤務。

<左>市澤 裕二（いちさわ ゆうじ） | プロフィール
1995年生まれ。青森県南部町出身。2016年4月～2018年3月まで、応援職員として山田町建設課に赴任。同年4月から山田町職員として勤務。

山田町水産商工課

高山

賢次さん

山田町建設課

市澤

裕二さん



「住民目線」で、防災無線業務や 防災計画の更新などに携わる

静岡県経営管理部
行政経営局行政経営課

矢崎

祐美さん

矢崎さんは静岡県から派遣職員として1年間赴任。住民の意見を取り入れながら、防災行政無線の工事・管理・アナウンスや、防災計画の更新などに取り組んだ。

「クマ出没」の アナウンスに驚く

静岡市出身で静岡県職員の矢崎祐美さんは、人事異動の際の派遣職員募集に手を挙げ、平成25年（2013）4月から1年間、山田町に赴任した。東北地方の大学を卒業し、岩手県にも多くの知人がいたことから、復興支援に関わりたいと希望したのだった。

配属先は総務課危機管理室で、防災行政無線の工事・管理・アナウンスと、防災計画の更新を担当。無線工事とは、震災で被害を受けたスピーカーを復旧することで、他の部署や復興計画と調整しながら進めることが求められた。また、震災前と同じ場所に設置しても、集落の住民全員が聞き取ることができなければ意味がない。そこで、同僚と一緒に山との位置関係などを確認しながら場所を選ぶと同時に、スピーカーの方向も微調整しながら設置。それでも、

「聞こえない」「聞こえにくい」といった声が寄せられることもあり、そのたびに現場に行つて調整し、住民に確認をとったという。

一方、アナウンスの仕事も印象深いと話す。「私の言葉のアクセントが山田町のものとは違うので注意してくださいねと言われ、最初は戸惑いました。しかも、防災や行政に関する連絡だけでなく、クマ出没情報など、放送しなくてはいけない情報が幅広くて驚きました。また、漁協のウニの口開けなどのお知らせも全町に流れることに、漁業の町と感じました」と懐かしむ。苦勞したのは、防災計画の更新だ。例えば、船に乗っている時に津波がきたらどうするか、といった命に関わることを他の職員と相談しながら決めて、計画に反映させていかなければならない。しかも、同様の検討事項は他にもたくさんあった。

「自分の仕事が町の将来を決めていくことにもなるので、本当に自分が進めていって良いの

かと悩んだこともありました」

そんな中で心がけたのが、住民たちがどう思うか、他の職員に相談し意見を聞くことだ。同時に、矢崎さんが所属する静岡県から防災計画に関する資料を取り寄せ、参考にした。長い間東海地震対策に取り組んでいる静岡県は全国でも「防災先進県」として知られていることから、何か山田町に取り入れられることがあるのではないかと考えたのだった。

活用することができたという。

ところで、矢崎さんには今でも忘れられない出来事がある。それは、通勤途中に車のタイヤがパンクして困っていた時、近くの生コン工場の社員さんたちが出てきて、すぐにスペアタイヤに交換してくれたことだ。静岡ではなかなか無いことに驚いた。

経験を、静岡県の 防災啓発事業に役立てる

こうして1年の赴任を終え、予定どおり静岡県に戻った矢崎さんは、「地震防災センター」に配属された。そこで取り組んだ防災啓発事業では、山田町の職員から聞いた「津波てんでんこの大切さ」「避難所でのるべき行動」などを

「山田町の人たちには本当に良くしていただきました。配属部署では派遣職員が私一人だったこともあり、皆さんが気遣って、私と年代が近い女性職員を紹介してくれたり、ウニなどの魚介類や山菜料理を持って来てくれたり。仕事面でも生活面でも支援していただきました」と感謝する。また、そうした職員との交流は現在も続き、岩手と静岡を互いに行き来するほどだ。そんな強いつながりができた山田町だからこそ、職員の本音も含めて震災の被害や復興までの歩みを記録し、後世に残しながら、「攻めの町」として発展してほしいと願っている。



達増拓也岩手県知事との交流会にも参加した



派遣最終日に配属部署の皆さんと



オランダ島での復旧作業の様子。津波で崩れた斜面をハシゴを使って登る



静岡へ戻った後も、山田町の職員の方々と交流は続いている



矢崎 祐美（やざき ゆみ） | プロフィール
1986年生まれ。静岡県静岡市在住。大学で経営経済学を学び、2009年に静岡県の職員となる。2013年、派遣職員として1年間山田町に赴任。静岡県に戻った後は、危機管理部やラグビーワールドカップ2019の大会支援を担当するなど、活躍の場を広げている。



鉄道復旧のための地盤造成や 陸中山田駅復旧をけん引

京阪電気鉄道から出向した長瀧さんは、鉄道土木技術者として鉄道の地盤造成事業や陸中山田駅復旧などに取り組み、「町民の足」の再生を果たした。

大組織との協議に対応しながら 事業を推進

山田町民の「足」である鉄道。その復旧に不可欠な基礎地盤の造成事業のため、大阪に本社のある、当時勤務していた京阪電気鉄道株式会社から「復興庁岩手復興局 復興支援専門員」として出向・赴任したのが、長瀧元紀さんだ。同社の幹部が国土交通省幹部と意見交換した際、「被災地復興における土木技術者の必要性」を感じ、復興庁を通じて被災自治体へ社員を派遣することに。その一人が長瀧さんであった。「岩手には縁が無く、思った以上に遠くて驚きました。でもそれ以上に驚いたのが、被災状況。赴任したのは平成25年（2013）4月で震災から2年経っていたにもかかわらず、建物基礎以外のがれきは撤去されていたものの、今だ何も無い状態。そんな中で商店などを営業している町民の皆さんから、復興への底力を感じ

ました」。

建設課に配属された長瀧さんのミッションは、JR山田線の鉄道復旧のため、町の造成計画を調整すること。当時、鉄道の復旧自体はJR東日本の、その鉄道を敷くための地盤造成は町の事業で、具体的には、かさ上げなどの設計や施工・事業管理が長瀧さんの担当だった。鉄道土木技術者として多くのプロジェクトを担当してきた長瀧さんは、その経験を生かし、JR東日本やUR都市機構、施工業者と協議をしながら積極的に事業を推進。その中で最初にぶつかった壁が、「そもそも鉄道の復旧をどう判断するか」という点だった。

「JR東日本では、乗客が少なく採算が採れないので、鉄道ではなくBRT（バス高速輸送システム）を提案しており、鉄道会社社員である私にとっても、それは妥当な内容でした。でも、住民の皆さんは鉄道を求めており、第三セクターの三陸鉄道で運行を担うこともあって、

鉄道での復旧が決まったのです。私も最終的に、町にとって良い結果だったと思えました」。

住民の要望にこたえて完成させた 陸中山田駅

もう一つ、陸中山田駅の復旧に関しても苦労があった。被災前、同駅の入口は東側のみで、西側からのアクセスが悪かったことから、長瀧さんたちは復旧するにあたり、西側入口の新設を提案。東西ホームの行き来のためのこ線橋の復旧も行う場合、バリアフリーに関して課題があり、決定まで難航したが、国やJR東日本と度重なる協議を経て、西側入口、こ線橋ともに実現させた。

このような鉄道復旧関連業務以外にも、土木技術者として、津波復興拠点である駅前付近の

中心市街地や、防災拠点となる高台の復興事業を担当。一方で、山田町の職員として選挙事務の手伝いをしたことも思い出深い。長瀧さんの赴任期間は平成27年（2015）6月末までの約2年だったが、こうした経験は「その後の仕事に大いに役立った」と振り返る。

「特に、鉄道復旧の判断の際に、事業者が収支だけでなく、住民目線・利用者目線で判断することも大切だと学びました。私たちも鉄道工事の提案の際に、地元住民の方々に説明する機会があるので、『住民目線』のスタンスを忘れてはいけないと肝に銘じています」。

着任中、プライベートで同僚と釣りやバーベキュー、自然散策などを楽しんだ長瀧さんは、山田町の山海の幸や豊かな自然を称賛する。これを武器に観光分野で「外貨」を稼ぎつつ、町民が鉄道を利用しながら暮らしを楽しみ、町全体が発展していくことを期待している。



陸中山田駅に新設された西側（山側）の出入り口（スロープ）



復興庁岩手復興局から山田町への派遣メンバー。小泉復興大臣政務官（当時岩手担当）と一緒に



山田町にある露露ヶ岳山頂にて。海岸から登れるので正味海拔分を制覇した感が味わえる。海岸側からの登山ルートは、なかなかハード（写真提供：伊藤洋平氏）



長瀧 元紀（ながたき もとのり） | プロフィール
1962年生まれ。兵庫県神戸市出身。1986年に関西の大学の土木系学科を卒業し、京阪電気鉄道株式会社に入社。鉄道土木技術者として、主に鉄道新線建設や連続立体交差化などのプロジェクトを担当。



「当時は派遣者の帰任のたびに集合写真を撮っていました。小職の派遣解除の際の建設課集合写真です」（長瀧さんは最前列、左から2番目）



町長以下、町の幹部の皆さんに高台防災拠点の造成工事進捗状況を説明

京阪ホールディングス株式会社
長瀧 元紀さん



約800キロメートル離れた地で 震災直後からの多岐にわたる支援を継続

北海道の池田町と池田高校吹奏楽部は、震災直後から、さまざまな形で物心両面で山田町を支援してきた。それは現在も続き、両町の絆は強まっている。

職員派遣の行政支援は 10年経った現在も

山田町と北海道池田町の距離は約800キロメートル。しかし東日本大震災以降、両町の町民の心の距離はどんどん縮まっている。

両町の交流は、震災以前からあった。池田町営で取り組んでいるワイン事業は「十勝ワイン」として広く全国に知られている。その応援組織として全国8カ所に「十勝ワイン友の会」があり、その一つが「陸中山田十勝ワイン友の会」であったことから、交流が続いていた。

東日本大震災直後には、池田町が、山田町に物資や義援金を届けたり、町職員を派遣するなど支援活動を展開。半年後の10月には池田町商工会青年部などの有志が山田町を訪れ、牛の丸焼きをはじめ池田町の特産品を振る舞って町民を励ました。こうした復興支援を受けて、平成24(2012)年3月に当時の沼崎喜一山田町長が池田町を訪れ、両町は「災害時における相互応援に関する協定」

を締結。池田町では現在も山田町へ職員の派遣を継続しており、令和2年(2020)8月には、佐藤信逸山田町長が支援のお礼と復興状況の報告のために池田町を訪れるなど、両町の絆は年々強まっている。

「ダンプレ」で 義援金と元気を届ける

池田町民の支援活動は、別の形でも行われている。踊りながら演奏する「ダンプレ(ダンス&ブレイ)」スタイルで人気の池田高校吹奏楽部が、震災の3カ月後から道内各地でチャリティー公演を実施。集めた義援金を山田町に贈っている。現地に行くことができない高校生でも、復興支援ができないだろうか、と考えていた部員に、震災直後、山田町でボランティア活動を行った「十勝まきばの家」のスタッフから、チャリティー公演の提案があったことがきっかけだという。

この活動に感銘を受けた池田町は、同部に山田町での公演を打診。昭和26(1951)年発足の同部にとって初の道外公演で、部員たちは喜んだが、一方で「震災で肉親や住居を失った人たちに演奏を楽しんでもらえるのだろうか」「自分たちのオリジナルのダンプレを、未知の土地で受け入れてもらえるのか」と不安も感じたようだ。しかし、当時顧問だった小出^{こいで}学^{まなぶ}先生の導きもあり、「いつもの演奏を精一杯やろう」と気持ちを切り替えたという。

平成24年(2012)9月、同部は池田町の「子ども夢基金」の助成を受け、山田町で1泊2日の公演を行った。期間中は、仮設住宅や商店街跡地など9カ所で演奏。当初は、県立山田高校吹奏楽部の定期演奏会で演奏する案もあったが、部員から「一人でも多くの人に楽しんでもらいたい」と、分散公演の希望があったのだという。2日間の来場者数は約1300人で、町民からは「良い公演

だった」「若い頃を思い出し、元気をもらった」などと喜びの声が上がった。一方の部員たちも、「町民の皆さんと一緒に音楽を楽しむことができた」「自分たちも元気をもらった」と、貴重な経験ができたことに感謝した。翌年の2月には、山田町から「ご支援に対し心から感謝申し上げます。私たちは必ず復興します!」と書かれた横断幕が贈られている。

その後も同部のチャリティー公演は続く。令和2年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で制限されたものの、令和3年(2021)2月までに実施した公演は300回以上、集めた義援金の総額は700万円を超え、今後も活動の継続を誓っている。



2020年8月、佐藤信逸山田町長訪問時のダンプレ(十勝毎日新聞 2020年8月27日掲載)



2012年9月、山田町での公演の様子(十勝毎日新聞 2012年9月29日掲載)



2018年8月、山田町での公演の様子(十勝毎日新聞 2020年12月31日掲載)



岩手県山田町に牛の丸焼きを届け隊出発式(十勝毎日新聞 2011年10月21日掲載)



北海道池田町(ほっかいどういけだちょう) | プロフィール
十勝平野の中央からやや東寄りに位置する、人口6431人(令和3年1月末現在)の町。高い山でも海拔100~200mを超える程度という平たんな土地が広がる。町営でブドウ栽培とワインの醸造を行う「ワインのまち」で、「十勝ワイン」ブランドで知られる。



北海道池田高等学校
(ほっかいどういけだこうとうがっこう) | プロフィール
2018(平成30)年に創立100周年を迎えた。北海道で7番目に総合学科へ転換した高校で、「創造 実践」を校訓とし、多くの卒業生を輩出。陸上競技やスピードスケート、吹奏楽など部活動も積極的に行っている。

北海道池田町
北海道池田高等学校
吹奏楽部



合唱・文化体験・草取りなど 復興交流活動を5年間継続

不来方高校では音楽部の祈りの合唱をきっかけに、文化部による文化体験交流や、運動部による清掃ボランティアなど、学校ぐるみの復興交流活動を5年間続けた。

避難所で、
深い祈りを込めて歌う

岩手県立不来方高等学校音楽部が震災後の山田町を最初に訪ねたのは、平成23年（2011）4月1日。支援物資や義援金を届けるとともに、避難所で歌わせてもらうことが目的で、以前山田町の教育長だった木村悌郎さんが、同部顧問の村松玲子先生の恩師という縁がきっかけだった。

「でも、町にはまだたくさんのがれぎが残っており、避難所だった山田高校の体育館では被災者の皆さんが3食とれない状況。体育館のステージは支援物資の置き場所となっていたように、それらを端に寄せて、私たちが歌うスペースをつくってくださっていました。本当にここで歌っていいのか、と全員いたたまれない気持ちでした」と村松先生は打ち明ける。

それでも『北国の春』『ふるさと』などを歌っていくうちに、「がれき色にしか見えなかった

ところに色が着いた」「今まで涙が出なかったのに、今日はいっぱい涙が流れた。これで明日から頑張ることができる」と言われた。そして最後には手をつなぎ、一緒に涙を流しながら歌ったという。村松先生は、「誰かのために深い祈りを込めて歌うというこの経験は、その後の私たちの音楽を変えました」と振り返る。また、その後この時の町民から「もう一度聴きたい」との声が上がり、音楽部はこの年、何度も山田町内の避難所や近隣の町村の避難所を訪問して、歌声による交流を行った。

交流を目的とした
イベントを実施

その後も音楽部の山田町への訪問は続いていたが、一方で、次第に被災地に関する報道や全国各地からのボランティアは減り、「風化」を危惧する声が増えるようになる。そこで平成「コーラス泉の会」との合同合唱も行い、それぞれの活動を終えた生徒たちも手話で参加するなど、会場は一体感に包まれた。

25年（2013）、同校では「今こそ自分たちができることをやろう」と、校内に「復興教育」という部署を立ち上げ、さまざまな支援活動を実施。その中で、被災地に行つて交流することを目指し、山田町との共催で開催したのが「山田町復興交流イベント」だった。「交流」のためには受け入れてくれる被災地の協力がなければ成り立たないだけに、「快く受け入れてくださった山田町の人たちには本当に感謝しています」と村松先生は話す。

イベントには音楽部員と生徒有志の約130人が参加することになり、生徒たちは、費用を捻出するため体育祭で募金活動に取り組んだり、当日町民に配るメッセージカードを作成するなど、準備段階から精力的に動いた。当日は、音楽部が仮設住宅集会場と公民館でコンサート、茶道部や書道部などの文化部が公民館で体験型交流活動を、運動部が仮設住宅の草取りを実施。公民館でのコンサートでは、地元の女声合唱団

「コーラス泉の会」との合同合唱も行い、それぞれの活動を終えた生徒たちも手話で参加するなど、会場は一体感に包まれた。イベントの報告書には、参加した生徒全員の感想が掲載されている。「草取りができたのは山田町の人たちのサポートがあったから。ボランティアは『やってあげる』ではなく『やらせてもらう』ものだと思った」「音楽部の歌を聴きながら涙を流している町民の方を見て、音楽の力のすばらしさを実感した」など、イベントは生徒たちにとって、今後の生き方や自らの在り方に深い示唆を与える機会となった。このイベントは形を変えながら、同校の復興支援事業終了の平成29年度まで続けられた。その後は再び音楽部単独で、毎年8月に復興交流コンサートを開催し、「コーラス泉の会」との歌声による交流も続いている。村松先生は、「泉のように、交流が枯れることがないよう続けていきたい」と引き続き町に想いを寄せる。



「くちびるに歌を」を歌う。ステージ上のスクリーンには、震災当時の避難所の様子が映し出された



復興支援活動報告書の編集後記には、村松玲子先生の言葉が記されている。「3年前のあの日から、内陸の私達は「何かしたい。何かせざるにはいられない。」と思いながら、何もできない自分を、そしてあの日のことを次第に忘れていく自分を、どうにもできずにいました。「山田へ行こう」と被災地へのボランティアを募集した時、思いがけずたくさんさんの参加希望があり、不来方生もみなそう思っていたのだと感じました。〈山田へ行つて変わった自分〉を、ささやかな報告集にまとめました。復興はまだまだ道半ばですが、未来ある高校生達がふるさとの復興を推進する力になってくれればと願っています。傍らにいよう 寄り添っていよう 立ち去らないでいよう 思いを馳せていよう 復興教育担当 村松玲子



不来方高等学校（こずかたこうとうがっこう） | プロフィール
1988年4月1日開校。社会の変化に対応し、生徒の個性を伸ばす教育を推進するため、普通科に学系（人文学系、理数学系、芸術学系、外国語学系、体育学系）を導入。音楽部は2019年までに、全日本合唱コンクール全国大会で金賞を通算19回、最高賞の文部科学大臣賞を通算7回受賞。



「ふるさと」を山田町の皆さんと。音楽部の生徒が会場を回り、手を取りながら一緒に歌う



「山田町民歌」を「コーラス泉の会」の皆さんと一緒に歌った

岩手県立

不来方高等学校



イベントや桜の植樹などで モノとともに「元気」を届ける

震災直後からのイベント開催や物資配付、その後も、桜の植樹や経営する飲食店での町産品使用など、瀬川さんの支援は途切れることなく続いている。

町民を巻き込んで イベントを開催

震災から約3カ月後の平成23年（2011）6月15日、山田町内の御蔵山公園で、ライブや古着市・陶器市・古本市などのイベント「I LOVE やまだ」が開催され、1200人以上の町民や近隣市町村住民でにぎわった。ライブには東京で活躍するミュージシャンたちが多数参加し、彼らの呼びかけにより全国から4トントラック1台分の支援物資も到着。当日だけでは配り切れず、主催者の「I LOVE 実行委員会」はその後も町内の船越地区や野田村などでイベントを開催し、被災者の元に届けた。イベント開催のきっかけは、盛岡市の瀬川弘勝さんが、交流のある東京在住のミュージシャン高野哲さんから「被災地のために何かできないか」と声をかけられたことだ。飲食店に勤務していた瀬川さんは、同僚や常連客が山田町出身だった縁で、毎年オランダ島に海水浴に

出かけ、町在住の仲間たちと交流していた。そのため震災直後からは毎日山田町に通い、必要な物資を届けて回ったりするなど支援。ミュージシャンにその話をしたところ、「山田町でお手伝いしたい」と言ってくれたのだ。瀬川さんたちは約1カ月後の開催を目指し、同委員会を立ち上げて準備。当日は、約20人の町民もボランティアスタッフとして参加した。「物資だけでなく、「元気」も届けたかった。ですから町民の方たちと一緒にやることにもこだわり、炊き出しなどに携わってもらいました」と瀬川さんは当時を振り返る。その後、平成25年（2013）3月3日には、弘前市の有志団体「エコッポプロジェクト」と「春のやまだ祭り」を共催した。

支援ではなく「会いに行く」

もう一つ、届けたい「元気」があった。桜の

樹だ。震災直後に仲間のお母さんが、津波がかぶった桜の樹を見て「もう咲くことはないだろうなあ」とつぶやいたことが忘れられず、「いつか町内に桜を植えよう」と心に決めていた。

同年11月、盛岡市内で「Diningわかんたんか」を開業した瀬川さんは、2013〜14年にかけて3回、常連客や仲間を誘い、運動会・球技大会を開催。自分たちがそれらを楽しみながら、その参加費の一部を桜植樹の資金にすることを思いついたのだ。

平成29年（2017）10月、瀬川さんたち実行委員会は、町内の造園家の指導のもと、同町北浜の復興住宅隣りの私有地に、ソメイヨシノ5本、ヤエザクラ5本、白ツツジ12株を植えた。土地の所有者の、「復興住宅の皆さんがお花見を楽しめるように」との願いに応えたものだった。植樹当日は、実行委員のほか町民や運動会の参加者など約60人が集まった。多くの人たちの思いが詰まった桜の樹は、翌年から少しずつ

花を咲かせている。

「震災直後も今も、『支援活動をしている』という感覚はない。仲間やその家族の方たちに会いたいから、ちょっとお土産を持って会いに行っている、という感じです」と瀬川さん。

平成30年（2018）10月には、7年ぶりの「I LOVE やまだ」を開催。活動を通じてつながった人たちの再会・交流を目指したもので、紅葉を植樹したほか、魚介類のバーベキューやオランダ島の遊覧など、町の魅力を満喫するイベントとなった。

一方、店では山田町産の魚介類や「山田の醤油」などを積極的に使い、「山田の味」を伝える役割も果たしている。その店が開業10周年を迎える今年には、「I LOVE」のイベント、運動会などを計画し、いっそうの交流を楽しみたいと考えている。さらに今後は、山田町の若者の活動をバックアップしていく予定だ。



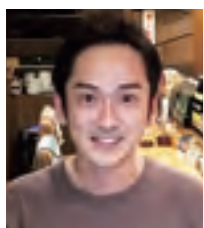
運動会といえば綱引き!



花が咲く日を楽しみにしながら、桜の木を植樹する



みんなで植えた八重桜が咲いた。樹のお世話は町在住の造園家さんをお願いしている



瀬川 弘勝（せがわ ひろかつ） | プロフィール
1976年生まれ。盛岡市出身。東日本大震災発生時には市内の飲食店に勤務していたが、3月下旬に辞める予定だったため、震災後は勤務せず、4月中旬まで毎日、その後も毎週山田町に通って支援活動を行う。山田町出身の元同僚を雇用し、2011年11月に盛岡市内に飲食店「Diningわかんたんか」を開業。



「春のやまだ祭り」スタッフで記念撮影。天候にも恵まれ、町民の皆さんも巻き込み、一緒にイベントを盛り上げた



「I LOVE やまだ」には本当にたくさんの物資が寄せられ、山田町をはじめ近隣市町村の皆さんでにぎわった

「Diningわかんたんか」店主
瀬川 弘勝さん



スクールバスや物品の寄贈で 子どもたちの学校生活・活動を支援

認定NPO法人国境なき子どもたち
(KnK) マネージングコミッティ

清水 匡しみず ぎょうさん

認定NPO法人国境なき子どもたち（KnK）は、子どもたちの登下校の「足」となるスクールバス6台のほか、小中高校などに多くの物品を寄贈し、子どもたちが日常の学校生活を取り戻すことに貢献した。

スクールバス支援要請に その場で即答

KnKは、開発途上国の困難な状況にある青少年を支援する団体である。スタッフの清水匡しみずぎょうさんは震災から間もない3月下旬、初動調査・支援のチームメンバーとして岩手県沿岸部に入り、各市町村の教育委員会を中心にヒアリングを行った。同団体としては初の国内緊急支援であったが、津波被害のスマトラ島の支援経験から、当初は、避難所や公民館に子どもたちの居場所を設置することを想定していた。ところが、この頃に清水さんたちが訪れた避難所には支援関係の車両が、そして公民館にはまとまった数の子どもたちはいなかった。また、震災直後とあって、被災地でもどんな支援が必要なのか情報が整理されていなかったため、清水さんたちは持参した紙おむつや粉ミルクなどを配りながら、直接被災した方の話を聞いて回ったという。

その後、山田町を訪れた際、教育委員会から「スクールバスを支援してもらいたい」と依頼された。「その場で我々が『はい』と返事をした時の、教育委員会の方の『信じられない』という顔が今でも忘れられません。あとで聞くと、断られることを覚悟していたので、私たちがその場で承諾したことにとっても驚いたようです」

とはいうものの、バス支援の経験がないKnKは、どこでバスを購入したら良いのかわからない。そんなある日、国道45号を車で走っていると、バスが停まっている車庫を見かけた。地元の運送会社だった。「何か情報を得られるかも」と直感した清水さんたちは、薬わづらにもする思いで事務所に入り、たまたまいた同社の会長（当時社長）もしくは、社長（現会長）に自己紹介をして事情を説明したところ、すぐに自動車販売会社を紹介してくれたという。こうして4月23日には、スクールバス6台を町に寄贈できたのだ。



スクールバスの支援は山田町が第一号となった（2011年4月23日）

担当を外れたあとも 支援要望に対応

その後もKnKでは、体操着や水着、制服、職員用パソコン、倉庫など、学校ごとにニーズを吸い上げて寄贈。職員住宅4棟の改修や、山田北小学校校庭の整備なども行った。6月には県内沿岸部支援を目的に、盛岡市内にKnK岩手事務所を開設（同年10月釜石市に移転）。翌平成24年（2012）には山田高校ポーター部へポーターやトレーラーを寄贈、平成25年（2013）には田の浜コミュニティセンターの再建など、同事務所を拠点に継続的な支援を行った。

清水さんは当初、1週間おきに東京から来県し、花巻市内の宿に滞在しながら山田町など沿岸部に通っていたが、岩手事務所開設後はいったん震災支援事業から外れる。しかし、その後

も山田町の教育委員会から直接支援の相談があり、そのたびに岩手事務所と連絡。前述の支援につながったのだった。また、清水さん自身も山田町の復興状況が気になり、2カ月に1回ほど訪れていたという。

「山田町の皆さんはあたたかい人柄で、大変な状況下でも私たちを快く迎え入れてくれました。特に教育委員会の皆さんは、自身が被災者であるにもかかわらず子どもたちのために尽力していて、頭が下がりました」と清水さん。以来、教育委員会や学校と関わりを強く持ちたいと考えるようになり、自分の子どもが通う小学校でPTAの役員を務めるようになったほどだ。

平成23年（2011）6月に開設されたKnK岩手事務所は、陸前高田市への支援終了を機に平成28年（2016）に閉鎖されたが、同時に、清水さんは東北担当に就任し、山田町とも再び関わるようになっていく。



田の浜コミュニティセンター開所式でのテープカット



黒板など教育資機材を支援した陸中海岸青少年の家で勉強する船越小学校の児童（2011年5月24日）



山田高校のコンピュータ部の生徒によるビデオワークショップ。山田町の復興をテーマに生徒主導でビデオ作品が作られた
https://www.youtube.com/watch?v=cEhO_Jzy6hA



田の浜コミュニティセンターの開所式。地元の子どもたちによる踊りが披露された（2013年4月18日）



田の浜コミュニティセンターの婦人会では場が笑顔であふれた（2013年4月21日）



清水 匡しみず ぎょう | プロフィール
1970年生まれ。千葉県船橋市在住。1994年に神田外語大学の英米語学科を卒業し、ネイチャーシネプロに入社し自然科学番組の制作に携わる。その後、国境なき医師団日本を経てKnKには2003年より勤務。
国境なき子どもたちHP <https://knk.or.jp>



民間ならではの視点で、物資寄贈からハード面・ソフト面と多角的に支援

震災直後から物資支援などに取り組んだ公益財団法人国際開発救援財団（ファイダー）は、平成23年（2011）秋に現地事務所を開設し、8年にわたり集会所建設や住民活動のサポートなど多角的な支援活動を展開した。

町民スタッフによる 現地事務所を開設

国際協力援助や自然災害被災者への緊急援助、広報啓発事業などを行っている公益財団法人国際開発救援財団（ファイダー）が、「支援が届いていない」という情報をもとに山田町に入ったのは、震災直後の4月上旬だった。すぐに避難所に食料品、衛生用品、日用品、冷蔵庫、洗濯機などを、7月から11月にかけて仮設住宅と在宅避難者の約3100戸にストーブ・掃除機などを寄贈。8月からは中学・高校を対象に用具の購入や施設の修復、大会参加などを支援する「部活動サポートプログラム」を立ち上げた。

「誰も経験したことがない大きな震災で、現地の状況が刻々と変化する中、私たちはどんな支援ができるのかを常に考え続けました」と話すのは、当時、同財団の東日本大震災復興支援チームリーダーだった前田桂子さん。被害が甚

大だった山田町で、必要な支援を迅速に、そして継続して行うためには現地に拠点を置くことが重要だと判断し、同年秋には町内に事務所を開設。スタッフには町民を雇用し、地元住民の状況や心情に寄り添った活動を目指した。

同財団では他の支援団体同様、当初はモノの支援が中心だったが、時間とともに町民の支援ニーズは変化。住民の気持ちが発災当時より少し前向きになると同時に、町全体の復興や発展につながる支援にシフトした。例えば、ハード面では、買い物支援バスの寄贈、バス停留所待合室の設置、住民の新しい集会所施設として2カ所のコミュニティセンターの建設などを支援。そのうちコミュニティセンター建設については、国の補助金事業の活用は難しかったため、同財団の支援は住民にとって大きな価値があった。

「私たちが心がけたことの一つに、『公的支援と重複しない、民間ならではの支援』というものがありません」と前田さんは説明する。

コミュニティの再構築につなげる

一方ソフト面では、自治会形成のための懇談会や、子ども向けのイベントや復興支援ライブなどを開催。また、カラオケ機器の無償貸し出しによるカラオケ大会の実施支援、足湯カフェなど交流会の開催、郷土食づくりといった町民のグループ活動のサポートなどにより、町民が自ら企画したり町民同士が顔を合わせる機会をつくり、コミュニティの再構築にも貢献した。

また、前田さん自身は、「イベント終了後、町民の方々が『ああ、いっぱい笑った』と言って帰られました。そんなふうには笑顔になるきっかけをつくるのができたのがうれしかったですね」と話す。さらにこれらの経験から、コミュニ

ティーターのつながりや、そこに暮らす人々の主体性が大事であることを再認識したという。

このように町民の日常生活が次第に戻ってくると、次の段階として、子どもの環境の回復に努めた。町内4カ所の放課後児童クラブへのエアコン設置、11校の小中学校への学校図書寄贈、レスリング・サッカー・ミニバスのスポーツ少年団の支援などである。背景には、長年にわたる開発途上国支援の経験に裏打ちされた、「子どもたちが元気に成長できれば、コミュニティや町の将来は明るい」という考え方がある。

同財団では平成29年（2017）3月に事務所を閉鎖し、令和元年（2019）に8年間の支援にひと区切りをつけたが、バザーでの山田町産商品の販売などで町への支援を継続。震災や山田町を忘れないでほしいというメッセージを発信し続けている。



仮設住宅や災害公営住宅団地等で開催した足湯カフェ。老若男女が集まり、足湯につかりながらおしゃべりに花を咲かせた



「カラオケは気持ち明るくなる!」と、機器の利用者はのべ1万6千人に上った



社協バス「まぢづけえ号」を寄贈（2012年3月）。当初は町内の買い物、その後は日帰り旅行の足として特にご高齢の方々に利用していただいた



前田 桂子（まえだ けいこ） | プロフィール
東京都出身。青年海外協力隊を経て、1999（平成11）年に同財団に入団。ベトナムやカンボジアで地域開発支援事業に携わり、東日本大震災発生直後から復興支援に従事。復興支援チームリーダーとして、2013年3月から現地事務所閉鎖の2017年3月まで山田町にて活動した。



「広げよう 友だちの輪、つなげよう 伝統の環、愉しもう やまだの和」を掲げて、町民と一緒に企画・実施した「わわわ」活動。様々な活動を通して町の多くの名所や人材に出会うことができた



利用者の使いやすさの工夫を取り入れた大沢川向コミュニティセンター（2016年11月竣工）

公益財団法人国際開発救援財団
（ファイダー）
ネパール事務所所長
前田 桂子さん



地域振興に向けた事業を展開し 子どもたちの自主性尊重と社会参加を実現

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの「こどもひろば」「子どもまちづくりクラブ」の活動により、子どもたちは自分の考えを言葉にし、社会参加の機会を獲得。子どもたちの企画・デザインによる施設誕生にもつながった。

子どもたちが自身を運営する 「子どもの居場所」を提供

国内外で子どもたちへの支援を行い、災害などの現場でも緊急支援活動に取り組んでいる公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン。平成23年（2011）3月末に岩手県にスタッフが調査に訪れた際、支援団体が入っていないことを聞き、山田町を訪れた。山田町の役場や避難所でのヒアリングで、避難している子どもたちの遊び場がないと知り、避難所となっていた山田南小学校と山田高校の2カ所（のちに船越保育園を加えた3カ所）で「こどもひろば」の活動を行い、スタッフの山田さんも4月6日から活動に参加した。

「こどもひろば」とは、主に幼児から小学生までを対象にした、避難所などでの「子どもの居場所」。子どもたちの自主性を尊重するため、山田町では特に、子どもたちが運営にも関わった。「被災直後は、喪失感の大きさから自分考

えを率直に話す子どもが少なかったのですが、子どもたち同士で話し合いをしたり、それがうまくいかない時に私たちが関わったりすることで、子どもたちは自分の考えを言葉にするようになりました」と山田さんは振り返る。

やがてこうした活動や調査の中で、子どもたちから、「町の復興のために何かしたいけれど、何をしようかわからない」という声が上がると、ちょうど避難所が解消され、仮設住宅に移行していた頃でもあった。そこで山田さんたちは同年7月、子どもたちが定期的に集まり、まちづくりのためのアイデアを話し合う「山田町子どもまちづくりクラブ」の活動を開始。当初3〜4人でスタートしたメンバーも、登録人数が20人まで増えた。復興した町のプランやゆるキャラの提案、町の歴史や特産品などを素材にした「山田町カルタ」の作成、復興に関する町民の意見の聞き取り・動画発信と活動の幅は広がり、子どもたちの社会参加につながっていった。

子どもたちが企画した 施設が誕生

その結果、こうした活動に理解・共感を示した町が、同クラブに、「新しい陸中山田駅の周辺に、子どもたちが企画・デザインする施設を建設したい」と提案。小学生から高校生までのメンバーは約2年がかりで企画を練り、平成28年（2016）7月、図書館機能を持ち、小中高生世代を中心に、町民が交流できるスペースを有する「山田町ふれあいセンター」が誕生した。同センターには、おしゃべりできるゾーンと静かに新聞などを読めるゾーンに分ける、乳幼児コーナーと隣接し子連れの親が利用できる食事コーナーを設ける、陽光を取り入れるために中庭を2つ設置する、といったメンバーのアイデアが反映されていた。

「7月2日の開所式では、『まちづくりクラブ』のメンバーが進行役を担い、ダンスや読み聞かせ

などのイベントを、町の子どもや大人の方が実施していました。その様子を目の当たりにした時、町民の方々のための居場所が機能し始めたと感じてとても感慨深かったことを、今でも忘れられませんが」

同センターの開所とその運営サポートで、山田さんたちの活動はひと区切りだったが、前述以外にも学用品・学校備品・防災用品などの配布、放課後児童クラブへの出前講座などの実施、スポーツ少年団・クラブ活動への備品配付・遠征費用助成、山田幼稚園の建設支援など、子どもたちへのさまざまな支援活動を展開。また、現在も、町や社会福祉協議会と連絡をとりながら経済的な支援事業を進めている。一方、開設に関わったふれあいセンターへの愛着も深く、「今後も、子どもたちを中心に幅広い世代の町民の方が集まり交流する場として、その機能を拡大してほしい」と望んでいる。



ワークショップの様子



子どもたちと一緒に作成した山田町カルタ



山田 心健（やまだ むねたけ） | プロフィール
1981年生まれ。埼玉県児玉郡美里町出身。神奈川県を卒業後、複数の国際協力団体の活動に携わり、2011年に現在の団体に入局。プログラムオフィサーとして、東日本大震災緊急・復興支援事業に従事。現在は国内緊急対応チームとして活動。



山田町ふれあいセンター開所式の1コマ



山田町ふれあいセンター前での集合写真

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 国内事業部

山田 心健さん



町とのスムーズな連携のもと 子どもたちの心身の健康を目指す

ユニセフは、町や他団体と連携しながら、子どもたちの心身の健やかな成長を目指して様々な支援を行った。

町は提案を すぐに取り入れてくれた

東日本大震災の発生時、近藤^{こんどう}智春^{ちはる}さんはアメリカ・ペンシルバニア州のピッツバーグ大学博士課程に在籍していた。それ以前の平成13年（2001）から7年間、国連児童基金（ユニセフ）の職員として各種支援に携わっていたことから、震災直後からユニセフ本部と連携して東北三県で緊急支援活動を展開していた東京の日本ユニセフ協会に協力を申し出て4月中旬に帰国。同協会が臨時に開設した盛岡事務所^{（岩手県）}に、フィールドマネージャーとして赴任した。

「岩手県の沿岸地域一帯の支援活動を行いました。特に被害が大きかった山田町、大槌町、陸前高田市に通うことが多かったですね。山田町の職員の方たちは当初から連携がスムーズで、保育士などを対象にした子どもたちの心理ケアのワークショップ開催など、私たちの提案をす

ぐに取り入れていただいたことを覚えています」と近藤さんは回想する。

ユニセフでは緊急・復興支援において、「緊急支援物資の提供」「保健・栄養」「教育」「心理社会的ケア（心のケア）」「子どもの保護」「子どもにやさしい復興計画」の6つの分野の取り組みを行っている。町でも震災直後は、避難所への支援物資の提供、子どもたちへの栄養支援・補食支援、保育園・幼稚園・学校の再開支援、日本プレイセラピー協会との連携による「心のケア支援」などを展開。特に、青年海外協力協会から栄養士を派遣してもらって行った栄養指導・食育支援や、保育園・幼稚園を通して行った補食支援は、近藤さんにとって印象深い。

「一連の支援活動を通して、町の職員の方たちが、子どもたちを大切に思っていることを強く感じました。私たちユニセフが、子どもたちのためにできることは限られており、地域が継続して守り育てていくことが基本です。そのた

めにユニセフがお手伝いをさせていただき、というスタンスなのです。その点で、山田町がさまざまな側面から、子どもたちや子どもたちに関わる大人たちにまで目を配り、支援していることを実感しました」

虐待・暴力防止に 精力的に取り組む

もう一つ、近藤さんたちが山田町とともに力を入れて取り組んだのが、虐待・暴力防止の支援である。日本ユニセフ協会は、平成23年（2011）10月から平成28年（2016）、12月にかけて、一般社団法人J-CAPTAやNPO法人CAP岩手と連携して、CAPのワークショップやシンポジウムを開催。CAPとは「Child Assault Prevention」

tion（子どもへの暴力防止）の略で、一連の活動には、町の児童相談員が中心となってワークショップを企画したり、町が日本ユニセフ協会と共同で「子育て支援相談窓口の案内」の冊子を作成するなど、町や町民が主体的に携わった。近藤さんはこうした町の姿勢に感銘を受け、同冊子を今も大切に保管している。

近藤さんの岩手県内での勤務は1年ほどで、その後ピッツバーグ大学に戻り、博士号を取得したあと、再びユニセフに復帰し、トルコ、そして現在はジンバブエで教育支援事業に関わっている。こうした活動の中で、「子どもたちが安全な環境下で健康に成長できること」を目指した、山田町や町民の取り組みを振り返ることがあり、そのたびに、山田町で目指してきたことは、世界中の国々に共通であると感じるのだとか。「これからも子どもたちによさしい山田町であり続けてほしい」とメッセージを送っている。



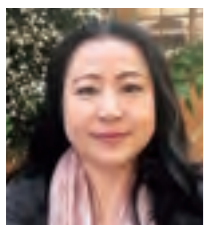
2012年3月31日開催「山田町おやこクッキングカフェ」の様子。青年海外協力協会から派遣されていた、栄養士ボランティアの方が運営に協力しました。山田町健康福祉課が主催したイベントです



©日本ユニセフ協会



2011年12月4日に豊間根保育園で開催した「祈りのツリー」の様です。ボランティアの方が沿岸部の保育所保育園を回って、子どもたちとオーナメント作りを行い、ツリーを飾って交流しました



近藤 智春（こんどう ちはる） | プロフィール
1972年生まれ。大阪府出身。2014年ピッツバーグ大学で教育学博士号取得。2001年からの7年間、2014年から現在までユニセフで教育専門官としてネパール、パキスタン、インドネシア、ウガンダ、トルコ、ジンバブエなどで勤務。2018年に現職のジンバブエ事務所教育マネージャーとして就任。

想定を超える大災害にも関わらず、保育中の乳幼児から1人の犠牲者も出さなかった岩手県。保育現場は、どのように子どもたちを守ったのか。日本全国の保育現場も「万が一」に備えられるよう、近藤さんは、岩手県保健福祉部児童家庭課とともに山田町はじめ県内の各保育所が行った避難行動等を調査。その結果を報告書にまとめました。
「東日本大震災津波 岩手県保育所避難状況記録～子どもたちはどう守られたのか」は、日本ユニセフ協会ホームページで公開中

国連児童基金（ユニセフ）
ジンバブエ事務所教育部

近藤 智春さん

東日本大震災 山田町での支援活動内容

国境なき子どもたち (KnK)／国際開発救援団体 (FIDR)／セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン／日本ユニセフ協会

| | |
|---------------------|---|
| <p>2011年</p> | <ul style="list-style-type: none">小・中学校スクールバス6台の寄贈（バス3台、バン3台） 職員住宅4棟の改修 山田体育館へカーテンの寄贈 教育委員会へ軽ワゴン2台の寄贈 小・中学校へ体操着、水着の寄贈 被災した船越小学校（青少年の家）へ校務用パソコンの寄贈 被災した山田北小学校校庭の整備 |
| <p>2012年</p> | <ul style="list-style-type: none">山田高校ポート部へボート6艇、トレーラー1台寄贈 山田高校へ懐中電灯80個の寄贈 山田幼稚園へトイピアノ32個の寄贈 |
| <p>2013年</p> | <ul style="list-style-type: none">田の浜コミュニティセンターの建設 教育委員会へ車両2台の寄贈 山田高校へビデオ機材3セットの寄贈 |
| <p>2014年</p> | <ul style="list-style-type: none">船越小学校へ屋外倉庫の寄贈 |

公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン (SCJ)

| | |
|---------------------|---|
| <p>2011年</p> | <ul style="list-style-type: none">こどもひろばを設置し、安全安心に遊べる場所を確保 震災で流されたランドセル、文房具を子どもたちに配布 避難場所に生活する方たちにタオル、歯ブラシ、石鹸などを配布 スポーツ少年団、部活動の父母会や郷土芸能団体などへ助成金を交付 学校、子どもたちに備品、学用品を配布 放課後児童クラブに対し、備品などを配布 「子どもまちづくりクラブ」を結成し、夢のまちプランを作成。アンケートや聞き取り調査を通じて子どもたちの声を発信、町に復興計画に対する意見書を提出 「子どもまちづくりクラブ」で地域報告会、東北こどもづくりサミットに参加 |
| <p>2012年</p> | <ul style="list-style-type: none">「子どもまちづくりクラブ」では町長や、地域住民に復興に関する意見を聞き、動画などで発信 |
| <p>2013年</p> | <ul style="list-style-type: none">学童保育施設・児童館へ非常用持ち出し袋と防災ずきんを支援 「子どもまちづくりクラブ」で町の進める「コンパクトシティ構想」に対し子どもたちのアイデアを町長に提案した。 |
| <p>2014年</p> | <ul style="list-style-type: none">「子どもまちづくりクラブ」では、町の魅力を発信する「山田町カルタ」を作成 |
| <p>2016年</p> | <ul style="list-style-type: none">「子どもまちづくりクラブ」の子どもたちが企画・デザインした「山田町ふれあいセンター」を建設（復興支援フォローアップ事業） |

日本ユニセフ協会

| 実施時期 | 内容 | 概要 | 支援先 |
|---------|---------|------------------------------|--------|
| 2011年3月 | 救援物資の提供 | 町役場を通じ、飲料水、子ども用下着、衛生用品、靴等を提供 | 町内各避難所 |

| 実施時期 | 内容 | 概要 | 支援先 |
|-----------------|-----------------|---|--|
| 2011年3月～10月 | 母子保健サービス再開支援 | 山田町と連携し、乳幼児健診、定期予防接種等の母子保健サービスの再開を目的とした保健衛生関連設備・備品や車両（一部リース品を含む）、母子手帳や育児支援冊子を提供。NPO法人HANDS、博報堂等と連携。 | 町内全域 |
| 2011年4月～2012年3月 | 栄養支援 | バランスの取れた栄養摂取が難しい避難所生活者を対象にした炊き出し用栄養強化米の提供、栄養士の派遣を通じた食育支援など。日本栄養士会等と連携。 | 山田南小(避難所)など |
| 2011年6月～9月 | 補食支援 | 幼稚園・保育園児約400名に補食を提供。就学前児童の食生活調査を実施し食育支援情報を提供。山田町、青森県立保健大学、岩手県生活協同組合等と連携。 | 大浦保、大沢保、織笠保、船越保、豊間根保、山田第一保、山田第二保、山田中央保、わかき保、山田幼、わかば幼 |
| 2011年10月～12月 | インフルエンザ予防接種費用助成 | 生後6か月～中学3年生の全幼児・児童のインフルエンザ予防接種費用(1本につき2000円)を助成。山田町等と連携。 | 町内全域 |
| 2011年10月～12月 | インフルエンザ予防接種費用助成 | 生後6か月～中学3年生の全幼児・児童のインフルエンザ予防接種費用(1本につき2000円)を助成。山田町等と連携。 | 町内全域 |

| | |
|---------------------|--|
| <p>2011年</p> | <ul style="list-style-type: none">町内の避難所に冷蔵庫、空調機、衛生用品・日用品・食料品などを支援 町内の仮設住宅に家電類（扇風機・掃除機・石油ストーブ等）を支援 町内の中学校・高校の部活動サポート・ボランティア活動支援（2014年度まで継続） 仮設住宅団地自治会形成の支援 仮設住宅団地の買い物支援（巡回バスの寄贈など、2013年度まで継続） 各種イベントの開催支援（子ども向けイベント・復興支援ライブ等、2014年度まで継続） 仮設住宅居住世帯へ年末ボランティア派遣（年越しそば配布、掃除手伝い、正月飾り作りなど、2013年まで） |
| <p>2012年</p> | <ul style="list-style-type: none">バス停留所・待合室の設置を支援 カラオケ機器等の貸し出し（2016年度まで継続） 仮設住宅団地における簡易消火栓の設置支援 山田町情報誌発行支援（2013年度まで継続） 山田町写真集刊行支援 |
| <p>2013年</p> | <ul style="list-style-type: none">写真展「私たちの山田～あの頃を忘れない～」開催 住民と協働して企画・実施する交流イベント（山田わわわ計画、体験会、街かど探訪など）を開催（2015年度まで継続） |
| <p>2014年</p> | <ul style="list-style-type: none">災害公営住宅入居者を対象とした交流会（足湯カフェ、オープンカフェなど）の開催（2016年度まで継続） |
| <p>2015年</p> | <ul style="list-style-type: none">大沢川向コミュニティセンターの建設支援（2017年4月完成） |
| <p>2016年</p> | <ul style="list-style-type: none">放課後児童クラブのエアコン設置支援、小中学校への学校図書寄贈 国体文化プログラム：復興やまだ写真展「再生～ささいせい」の開催 |
| <p>2018年</p> | <ul style="list-style-type: none">飯岡コミュニティセンターの建設支援（2019年4月完成） |

| 実施時期 | 内容 | 概要 | 支援先 |
|------------------|-----------------------|---|-----------------------------|
| 2011年3月～4月 | 保育園再開支援 | 保育活動再開に必要な備品・遊具などを、各園のニーズに合わせて提供。 | わかき保、大沢保、山田第二保 |
| 2011年8月～2012年3月 | 保育活動維持支援①(保育ボランティア派遣) | 短期保育ボランティアを派遣(のべ66人、246日間)。東京都社会福祉協議会、岩手県保育協議会と連携。 | 山田中央保、豊間根保、わかき保、山田第一保、山田第二保 |
| 2011年11月～2012年3月 | 保育活動維持支援②(保育士派遣) | 保育士2名を長期派遣。青年海外協力隊と連携。 | 山田町地域子育て支援センター |
| 2011年9月～12月 | 保育活動維持支援③(行事支援) | 遠足費用(バスチャーター代など)を支援。電通、博報堂等協力「祈りのツリープロジェクト」クリスマス会の実施。 | 山田中央保、山田第一保、豊間根保、船越保 |

| 実施時期 | 内容 | 概要 | 支援先 |
|------------------|-------------------|---|-------------------------------|
| 2011年3月～8月 | 学校再開支援①（備品提供） | 被災校、教育委員会等への職員用オフィス家具等の提供。夏季に全小中学校での天井掛け扇風機設置を支援。 | 全小中学校、教育委員会 |
| 2011年4月 | 学校再開支援②(清掃支援) | ボランティアの派遣(のべ31名)を通じた被災校舎の泥出し等の清掃、備品運搬作業支援。教育委員会と連携。 | 全小中学校 |
| 2011年4月～8月 | 学校再開支援③(文具・学用品支援) | 各学年別の文房具セット(ノート、鉛筆等)と学用品セット(体操着、リコーダー、習字道具等)を提供。教育委員会、教職員組合、学校生協等と連携。 | 内陸へ避難(転出)した児童を含む全小中学生(約1200名) |
| 2011年5月～12月 | 中高総体参加支援 | 県教育委員会を通じ、参加生徒の交通宿泊費等を支援。 | 該当中高生 |
| 2011年8月 | 通学支援(安全確保) | 日照時間が短くなる冬季に備え、携帯懐中電灯を配布。 | 全中学生 |
| 2011年9月～2012年12月 | 中学生補食支援 | 宿題・家庭学習支援施設利用者約50名への補食提供支援。 | 山田ゾンタハウス利用中学生 |

| 実施時期 | 内容 | 概要 | 支援先 |
|--------------------|----------------------------|---|--|
| 2011年4月 | 「子どもにやさしい空間」 | ユニセフ支援物資「箱の中の幼稚園」「レクリエーションキット」（国内調達の特等品を含む）を用いた、専門家とボランティアによる安心・安全な場所での遊びをベースにした心のケア支援。 | 山田南小（避難所）、豊間根保、船越保、山田第一保、山田第二保、織笠保、大沢保、山田中央保 |
| 2011年4月 | 「ちっちゃな図書館」 | 全国から寄付された絵本・児童書のセット。避難所等での心のケア支援。 | 山田南小(避難所) |
| 2011年4月～7月 | 未就学児の心のケア①(保育士・保護者研修) | 日本プレイセラピー協会と連携し、保育士・保護者等を対象にした「プレイセラピー的子どもとの関わり方の研修」を実施。 | 保育園、幼稚園の保育士、園長ら |
| 2011年4月～※ | 岩手県主催心のケア会合への参加 | 県教育委員会・児童家庭課主催の月例会合にオブザーバー参加。山田町を含む現場情報を共有し、県の啓発ツール作成に協力。(※後述「未就学児の心のケア②」などで活動を継承) | |
| 2011年5月～6月 | 「外遊び(遠足)」支援 | 「遊び場」の流失などで外遊びの機会を失った子どもたちに、内陸行楽地への遠足機会を提供(のべ7日間)。 | 保護者を含む1,323名が参加 |
| 2011年10月～2016年12月※ | 未就学児の心のケア②(個別相談) | 日本プレイセラピー協会等と協力し、保育園・幼稚園の要請に基づき、臨床心理士を派遣し心理相談を実施。 | 保護者、保育士 |
| 2011年10月～ | 岩手県「沿岸三地区こどもの心のケア推進」事業への協力 | 全国児童家庭支援センター協議会などと協力し、左記事業に協力。宮古市(沿岸児童相談所)、大船渡市(太陽学園)を拠点とする児童精神科医の活動を支援。 | |

| 実施時期 | 内容 | 概要 | 支援先 |
|-------------------|----------------------|--|--------------------|
| 2011年3月～※ | 災害孤児の代替的養護に関するアドボカシー | 震災直後に一部政治家や報道機関などから孤児院建設の必要性を求める声が上がったことを受け、国際スタンダードに基づく震災個人に対する代替養護を通じた支援を訴えるアドボカシー（政策提言）を実施。国会議員らとの意見交換やシンポジウムを通じた世論啓発などを実施（※後述の「父子家庭支援」で活動を継承）。 | |
| 2011年6月 | 災害ボランティア行動規範の普及 | 全国社会福祉協議会及び各被災市町村社会福祉協議会と協力し、災害ボランティアを対象に、支援従事者の行動規範に関わる国際スタンダードに準じてまとめた「子どもの保護と安全確保のための行動規範」を周知。 | 社会福祉協議会／ボランティアセンター |
| 2011年7月～※ | 虐待防止 | 県児童家庭課による児童虐待とDV防止の周知啓発活動に協力。啓発チラシやラジオメッセージを制作。山田町には、啓発メッセージが入ったクリアファイルを提供(※後述の「子どもの暴力防止」で活動を継承)。 | クリアファイルは町内全戸に配布 |
| 2011年7月 | 支援情報の周知 | 県児童家庭課による被災孤児養育家庭等向け支援制度周知活動に協力(チラシ作成など)。 | |
| 2011年10月～2016年12月 | 子どもの暴力防止 | J-CAPTA、CAP岩手との連携事業。子どもたちが暴力から身を守るために必要な知識や技術の研修機会を提供するワークショップスペシャリストの養成やシンポジウムの開催、幼稚園、保育園、小学校等でのワークショップの実施を支援。 | 町内各所 |
| 2012年4月～2016年12月 | 父子家庭支援 | 子どもや家族に関わる専門家、自治体担当者、民生委員等の被災者支援従事者を対象に、父子家庭・父親育児に関する支援技術・知識・情報・思考力を身につける「お父さん支援員」研修を実施。NPO法人新座子育てネットワーク、岩手県保健福祉部児童家庭課と連携。 | |



「”やまだまち”との出会い」

絵本作家 **やまだ まち**



Profile

愛知県出身。絵本作家。同じ名前であることから山田町を知り、震災後に町を訪問。デビュー作の「山田商店街」(幻冬舎)は、架空の山田町で巻き起こる少し不思議な物語を収録した短編集。絵本「てのりにんじや」「どこどここけし」「しかしか」などを出版。架空の「山田県」を舞台にした児童書「山田県立山田小学校」は8冊続く人気シリーズとなる。

私の名前は「山田マチ」といいます。「山田」は本名、「マチ」はペンネーム。

架空の「山田町」で巻き起こる、クスリと笑える少し不思議な物語を書いていきたいと、この名前にしました。2009年に短編集「山田商店街」を出版。本のなかの「山田町」は、ダルマを食べる食堂があったり、ハトやヤギが郵便配達をしていたり、「ヤマダ伝記」が映画化されていたりするファンタジーな町。

そんなお話をつくるなかで、実在する「山田町」についても調べました。全国あまたある「山田町」のなかで特に興味をそられたのが、岩手県の山田町。山田線、山田湾、山田道路、山田せんべい……山田だらけの町にいつか行ってみたい。そう思っていた矢先の、2011年3月、テレビやラジオから「やまだまち」という言葉が連呼されるようになります。

東京にも被害の深刻さは伝わってきました。私は山田町関連のニュースにかじりつき、ネット上で情報をあさりました。震災発生から10日たったころ、山田町観光協会のブログが更新さ

れました。その内容に、私は下肝を抜かれ、感動の涙を流し、笑いました。

案内所も、かき小屋も、養殖いかだも全部なくなつたというのに、絵文字いっぱいポツポツなテキストで「元の町に戻るまで時間はかかりませんが待っててくださいね」と元気いっぱい。

それから日々綴られてゆく、被害の深刻さはウラハラの能天気な文体のブログを追いかけながら、山田町を応援したいと強く思いました。夏になり「スマイルガーデン山田商店街」誕生というニュースをキャッチ。9月、私はひとり、山田町に向かいました。

復興もままならないなか、ボランティアでもビジネスでもないのにおじゃましていいのだろうかと不安でした。町に足を踏み入れ、ガレキの積み上がる惨状を目の当たりにして、不安はさらに増しました。しかし町のみなさんは、そんな私を受け入れてくださいました。

「なんで山田に来たの？」
「名前が『山田マチ』っていうんです。だから

来ました！」

このQ&Aはすべり知らずで、老若男女問わず、大いに笑ってくださいました。名前のおかげで、たくさんの方に出会い、お話を伺うことができました。町のみなさんのたくましさ、ほがらかさ、前を向く底力に心を打たれ、海の美しさに魅了され、食べ物のおいしさのとりこになり、私はすっかり山田町のファンになりました。

それから、幾度となくおじゃましています。“山田”という看板の写真を集めて「山田だらけの山田町MAP」をつくったり、読者の方を集めて「山田町ツアー」をしたり、展示会をしたり、ただ遊びにいったり。

訪れるたびに町は変化していきます。でも私が最初に好きになった、人と海は、ずっと変わりません。

ここ数年、児童向けの『山田県立山田小学校』という本を執筆しています。架空の「山田県」で暮らす小学生たちを主人公にした物語は、おかげさまで8巻続く人気シリーズとなり、全国の子どもたちに読まれています。

モデルはもちろん、山田町。山田県は、学校の勉強をちゃんとやっていたら、こどもも働くことができます。こどもだけで運営する商店街や観光協会やペンションもあるんですよ。

震災直後に出会った、明るくてたのもしかったこどもたちの顔を思い浮かべながら書いています。彼らは大人になり、山田町を支えていることでしょう。

私の夢は、全国の「山田さん」を集めて、山田町ツアーをすること。みんなで山田の名所をめぐりたい。「山田町に山田さんはあんまりいない」という衝撃の事実を共有したい。

ひとたび山田町を知れば、きっとまた訪れることになるでしょう。山田町は、2度目で「ただいま」と言いたくなるような魅力があると思うのです。山田町を、全国80万人の「山田さん」の心のふるさとに。

私は山田町に出会うことができ、この名前にしてよかったと、つくづく思っています。



A

▲ 復興したオランダ島からの風景。山田湾内に浮かぶ養殖いかだと、海の向こうには山田の町並みが見える。



B

■ 山田マチさん著作の「山田県立山田小学校」。読めばクスリと楽しくなる人気の児童文学シリーズ。

■ 2011年夏にできた「スマイルガーデン山田商店街」。山田マチさん訪問のきっかけになりました。

■ 空想のお知らせをする架空の「山田町掲示板」という山田マチさんの作品です。掲示板ラシは、実際に山田町で開催した展示会の案内です。



C



D